

患者が変われば 医療が変わる 医療が変われば 地域が変わる



島根益田がんケアサロン 代表
C・T・V創生研究所 所長 納賀 良一

1937年5月、石川県金沢市生まれ。同志社大学文学部卒。特殊精密機器メーカーの(株)フジキン総務部長兼改革推進室リーダーを経て、1994年3月、1ターンで益田市移住。益田ドライビングスクール合宿型システム作りを依頼される(ガイアの夜明けで放映)。その後、C・T・V創生研究所設立。地域で観光、定住、教育、医療など街おこしを実施。2005年12月、全国初のがんサロン開設。

最終回 がんになったのだから がんから学ぼう

今月号が最終投稿になる。5年も続けてきたが自分で自分を褒めてあげたい。思えば医療の地域格差を感じて、全国初のがんサロンを立ち上げてから14年が過ぎた。地域格差には手術、抗がん

「12位1体」で出会いと繋がり

剤、告知、患者の知識などいろいろあり、どれも「いのちの格差」につながる。「3位一体」から「7位一体」へ、現在は「12位一体」へと進化。患者・医療現場・行政・メディア・県議会・産業界・大学の「7位一体」から、建築学・宗教学・人生学・在宅医療・対話力を追加し「12位一体」を作り上げた。

建築学については、住宅環境はバリアフリーだけでなく庭の造作、カーテンの色などで四季を感じる事ができれば在宅医療の患者にとってうれしい。「宗教学」は、医療が及ばないスピリチュアルな分野を宗教がカバーできればと考えた。

国は在宅医療に舵を切り、早期退院を進め、自分の住む街でいかに安心して過ごせるかが大きな視点となる。そこで最後に「対話力」を追加した。文明の利器が発達して1日誰ともしゃべらなくても過ごせる時代となった。便利な社会がコミュニケーション力を低下させた。その原因として「話す力」＝「対話力」が無くなってきているのだろう。医師との会話にもかみ合わない、時々患者仲間から聞いている。

「7位一体」をベースにして「島根モデル」が形成され、全国から視察が相次いだ。とくに行政・メディアとの連携は「島根モデル」の原形を創った。「がんサロン」支援塾は2011年から16年まで地元益田市で7回開催し250名を超える参加者があり、がんサロンの開設・運営のノウハウを伝授した。参加者は全国各地からで、医療者、研究者、患者など多彩なメンバーであった。命の大切さ以上に人との出会いと繋がりが大切なのを教えてくれた。

人脈は人を大きくさせる。自分もたくさん学びをさせてもらった。今後いつまでの命かは分からないが、死ぬまでがん患者としての思いを発信し続けていきたい。またどこかでお会いできるでしょう。それまで……。